

農業ジャーナリスト 窪田新之助コラム

Vol. 4

そもそも里山での人間活動が活発な時代には、野生動物は集落には容易に近づけなかった。野生動物の多くは臆病だからである。たとえばイノシシ。「猪突猛進」と言われ、そのために干支では「勇気と冒険」の象徴とされているようだが、実際はその言葉とは裏腹に小心者である。集落の周辺部の雑草が刈り払われていたり、里山の間伐がされていたりすれば、見通しが良くて人目に付くので人里に入り込みにくい。だから集落に食べ物があるというのを学習する機会は少なかった。

それが今では林業の衰退や過疎・高齢化で里山や農地は荒れ、野生動物は人目に触れずに集落にやって来られるようになった。そこで段々と集落に食べ物があることを学ぶ。いずれも山の恵みより美味しく、農地やその周辺に行けば量は豊富にある。いまや野生動物にとって集落は楽園になってしまっているのだ。

集落を野生動物の楽園にしないために、まず取り掛かるべきなのは正しい知識を身につけることだ。対策の主役である農家が餌とは何かを学び、一つ一つなくしていくことである。

野生動物が集落や農地に入るのを防ぐことも重要になる。ただ、これに関しても知識不足から効果が上がらない方法を採用しているところが多い。電気柵を例に挙げれば、動物の種類に応じて支柱の間に張る電線の間隔や本数には決まりがある。これが守られていないために、野生動物の侵入を許してしまっていることが多々ある。

農家に正しい知識を身につけてもらうためには指導機関の役割が重要だ。たとえば京都府は亀岡市にある農業試験場内に柵の展示圃を設置。農家や関係団体職員の視察を受け入れて、専門の研究員が電気や金網、トタンなど柵の種類ごとに正しい使い方を説明している。

こうした展示圃がなくても、最近では自治体や研究機関が鳥獣の種類に応じた対策マニュアルを用意している。指導機関の中には専門家が出張して、防除の仕方を教えてくれるところも出てきた。これらを利用しながら、農家が自主的に学んでいくことが被害を防ぐ第一歩である。